

ひおどしの鎧もかすむ　　く桜峠く

あくる日の朝早く、バードは市野々を出発した。天気は〇日続きの晴れ。梅雨は、もう開けるのかもしれない。バード達のために用意されたのは、またもや牛。荷物運搬用の3頭の牝牛だった。バードはその一頭に乗ることになった。小さな鼻と短い角、まっすぐな背骨に深々とした美しい胴体をしている。



なんと、この牝牛には子牛がついてきており、チュウチュウと音を立てながら、おいしそうに乳を飲んでる。

「イトー、おいしそうに飲んでるわね。牛の乳、私も飲みたいんだけど、しばらくもらえないかしら？」

「聞いてみますね」

「この牛の乳、搾って分けてもらえませんかね。バードさんの国では、牛の乳を飲むのです。そのまま飲んでもいいし、紅茶に入れたりもするんです」

イトーが村人に聞くと、大笑いが起った。

「おめえさま、何言ってるんだ？牛の乳を飲む？こんな強いにおいのもの飲むなんて。

アハハ！冗談だべ、牛の乳を人間が飲むなんて」

「んだ、んだ。こんなご婦人が牛の乳を飲むなんて、言っちゃなんだけど、とってもいやらしい感じだべ」

「お茶にこんなもの入れたら、臭くて飲めねえべ」

このころの日本は仏教の国、肉食禁止令がたびたび出され、大っぴらに牛肉を食べるのは長らくタブーとされていた。幕末から明治維新・開国で明治天皇が肉食を始めたりにしてようやく牛を食べるようになり、牛鍋屋がができはじめたりしていた。しかし、牛乳を飲む習慣はまだまだ広まっていなかった。

∞頭の牛は、全て木綿の布を着ていた。布には青い龍の絵が描かれており、虫刺されや泥から牛を守るためのものだという。牛がどれほど大切にされているかを物語っている。天気がよいおかげで、コメや酒などを背負った何百頭もの牛が、ひっきりなしに桜峠を下りてくるのとすれ違った。



峠の頂上について、ひと休みしたときイトーが一本の木に向かって指さした。

「バードさん、あの木を見て下さい」

「あ、桜ね。幹にきれいな横線が入ってるから、すぐわかるの山桜にしては大きいわね。この峠の名前、桜峠と言うんでしょう？」

「よくわかりましたね。もう夏なので、桜は散ってしまいました。昔、ここを通った坂上田村麻呂という人が歌を詠んでいます」

「ほう。どんなポエム？」

「ひおどしの鎧めだたぬ桜かな」

「燃えるような赤の鎧をきた武士でも、この華やかな桜の下では目立たなくなる。そんな意味です」

桜峠の先は、桜川という小さな川が流れている。晴れ上がった空から降り注ぐ木漏れ日のなか、バードは桜川沿いの道を下っていく。